

911.3
八
乾

非  
諧  
色  
蕉  
決

乾





Handwritten Japanese text in six vertical columns, written in a cursive style (sōsho). The text is mirrored across the gutter of the book.









三本三葉の此の葉は...

故實 予初學方時より俳諧の法を志するが次第とせん

けふ大祿句抄巻第廿六も不見候様にて其分のり

きつりおよそを志しともけふ是れ先師の御説

五つりとも傳ふ是れを記す

一卯七云先師の御説之法を用ひ給ふ也云来日は公承候と

用ひ給ひてなほまた古式を賜ひ給ふ

事もありしれと私に給ふ候り候あり事一先師の御説と

是れ九の御説を以てえと給ひ候はれ候御説候

まじり候り候御説あり候久しといふ候



連枕形を長形に改めたるは、未だ法式ありて  
と云ふも式をかり用ひて是を主として枕形法式を改めたる  
事もなかりしに上より定むる法式もあらずとも若其人等し  
とてと指さるるも罷あらずと一其時乃ち遠近ハ皆を其  
とてより連系の法式をかり用ひらるるありて其の  
と日此先河を其時より改めたる連系にすべしと云ふ  
別不立也一其人と云ふを以て其家の奴僕方なりと云ふ  
笑作の河法に名あり

一お七曰蕉門小まふる留の船なるも亦之を用ゆるもハハハ  
去來之船白船と云ふ上下也其と連る船を能と云一白く

抑もさかしくはる移んかき免く亦其下の白にさるるといぬ  
あつた一文字ありとつたハ連系乃法也らわハ其家の法  
よ〜の寄其下の白にらるるも言ふ〜此枕形の白なる也

本ノマ、  
青山乃いちこさ〜一第小き〜

た〜そり〜も〜も〜

向ふに川き水そそ修をあらうとらる

か〜アア〜とヤ人乃ア〜

是〜〜まふる留の船乃法なり〜事ともおぬ〜

一お七云蕉門小まふる留の船なるも亦之を用ゆるもハハハ

あり白く其の〜を其家の奴僕方なりと云ふ



何れもあうくはく移んかき免しあか下の白にまらぬといぬ  
あきね——  
よ〜のあか下の白にそくもまう〜これ御指のう白なる〜

ち山乃乃ちこさ本ノて、〜〜〜

た〜〜〜

何れに川き水そそ流そあうとらる

か〜〜〜

あ〜〜〜

一あ古云蕉門不喜李の白真うけゆ〜や去来曰毎季の白ハ折

あり真以ま〜〜



芭蕉の如く静かにおもてをきかたありあつたをいふは  
 いふ所のゆゑありて四季のこころを其のまゝにいつく  
 かりんをいふはまゝにいつくをいふはまゝにいつく  
 其のまゝにいつくをいふはまゝにいつくをいふはまゝに  
 一ツはまゝにいつくをいふはまゝにいつくをいふはまゝに  
 一ツはまゝにいつくをいふはまゝにいつくをいふはまゝに

芭蕉の如く静かにおもてをきかたありあつたをいふは

何れれはまゝにいつくをいふはまゝにいつくをいふはまゝに

又芭蕉の如く静かにおもてをきかたありあつたをいふは  
 一ツはまゝにいつくをいふはまゝにいつくをいふはまゝに  
 一ツはまゝにいつくをいふはまゝにいつくをいふはまゝに

芭蕉の如く静かにおもてをきかたありあつたをいふは

かくのおもてあり

一 卯七曰芭蕉に切妻のこころいふ言来曰瓦あり先師曰汝切  
 妻まゝにいつくをいふはまゝにいつくをいふはまゝに

先師曰いふ言来曰たてをいふはまゝにいつくをいふはまゝに

楮根あり附白の切妻はまゝにいつくをいふはまゝに  
 志うと志うといふはまゝにいつくをいふはまゝに

何れれはまゝにいつくをいふはまゝにいつくをいふはまゝに  
 といふはまゝにいつくをいふはまゝにいつくをいふはまゝに

芭蕉の如く静かにおもてをきかたありあつたをいふは  
 一ツはまゝにいつくをいふはまゝにいつくをいふはまゝに



仰る句ありはにちありて自然にせしむるは  
 一いつて物を承らるるは之は如何なるか  
 て接接るとせしむる又又子同先師曰あまに  
 又子掛入るる又或人同先師曰あまに  
 又いつて不問何ハ一事もや  
 漢のふらふたあ  
 一いつて去来曰此の事を  
 せん用口も  
 せん  
 せん

人  
 魚  
 瓜菜

一いつて花の  
 方  
 古来曰引あ  
 昔人の  
 てを



ま〜〜〜とゆきやうなりけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 乃た免れん遠くゆきゆきと雪をさ〜〜〜とゆきけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 ハ〜〜〜とゆきやうなりけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 切る白ありあにちるさや或るはけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 して〜〜〜とゆきやうなりけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 て俗接するすと整へ又た又同先の所曰ふまを三十一すまわ〜〜〜とゆき  
 又ま摺入り又或人同先昨曰切る白ありあにちるさや或るはけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 ま〜〜〜とゆきやうなりけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 清の〜〜〜とゆきやうなりけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 切る白ありあにちるさや或るはけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき

人〜〜〜とゆきやうなりけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 魚〜〜〜とゆきやうなりけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 瓜〜〜〜とゆきやうなりけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 ま〜〜〜とゆきやうなりけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき

一卯七々花不空夜もや古来先昨曰切る白ありあにちるさや或るはけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 切る白ありあにちるさや或るはけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 古来曰引あつ〜〜とゆき二不あり一、一、座敷敷す〜人ありて  
 昔人ハ不をを〜はま〜とゆきやうなりけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき  
 て不をを〜はま〜とゆきやうなりけいりさうにさむにわたりぬもあつ〜〜〜とゆき

芭蕉詩



切若くして他子ゆつりくも人もあつてゆつる能くも若くも  
 呼出〜を招き玉を他を又あはれの時をよに二本はの  
 与ぬ〜引続を辞退すなりきいゆつるも引あけて  
 作る也おはもたつ玉を呼出せし呼出せよの造り〜  
 会ふ此羅あつて又瓦も形〜引搦るはりん〜の他若  
 ちつとあつてのさつは臨心力その式也孝死種多古やを虎も  
 庵も〜〜一人あをかゆる玉ありこれ玉一自とおひ  
 人乃白はあ〜も田家乃をま〜りてむを〜  
 一卯七の曰積葉子玉を搦か〜ゆ〜といふ言来曰げ時  
 玉をさ〜れたか〜と先昨曰返きいふ言来曰凡玉き

搦かあ〜と〜一自一通り〜玉ひり〜  
 も玉や〜あ〜ゆ〜玉やのぬ〜も〜言来あり言来  
 言来〜と〜のゆ〜と〜のひ〜と〜先昨曰  
 も上右人の四本のうち一本を搦ありゆつるにもあつた  
 本〜は〜も〜作〜と〜と〜言来〜と〜  
 か〜と〜言来〜と〜也〜系搦〜と〜と〜  
 也〜と〜言来〜と〜と〜  
 一卯七の曰甚門悪を一自あ〜も拵る〜と〜言来曰予は  
 事の時〜と〜言来曰〜と〜悪あり拵る〜と〜執以拵二自  
 言上玉自と〜と〜は〜式のは也一自〜と〜拵る〜と〜大切の

古書

上四



概かあらまるといふ一過りの事ありてまはる茶丸をむき  
 も茶やりの事より茶丸やりの事といふもよき事あり年々  
 茶丸をさうをのり茶丸をさうと申の事あり先作曰ふに  
 もよ右人の四本のうち一本を搦りけりよはもなすまふ  
 本より茶丸を搦るも佞を下すれと尋常のさうをさう  
 かすは茶丸をさうと申す事極くさうをさうをさう  
 此より茶丸をさうをさうと申す事極くさうをさう

一 和七の目蓋門を搦る一白をさうも搦るいふ事古来曰すけり  
 事如河内守の事曰ふ所は茶丸を搦る事勅以て二白  
 言上五白と申す事極式の法也一白をさうを搦る事極く大切の







きこわかくもはとをきほくの能く面白もなると出上  
りしとよかふ屋や軸の上をかくふとむすあふふたつれ  
しものしん連系かろふあく例指の上とあくねそききとよ  
中もあくす然ともあ古人の罷人たろふをぢぬふそた  
後多かゆよかろふを思ひゆらめ

一 和七曰蕉の予言の筆を月に用ひゆらやを来日せらあり  
洒堂海川のそふよりあおのゆらり先河曰言の筆のゆ中に月  
あはかおに月のゆはせんか拙うらとととや月を月を月  
さそ喜と月とんさそんもいと月次かその筆を入らと  
とつちかともさそとやととおのりまは風玉ととらと



青房此与出の予曰先河改子社式をさうし上をいさ  
 法不習りんと是るは月に用ひ給うれば此律六の書とて  
 小先河の事いふを月と一語六の事そ然るうなり  
 志ふらんと何れ所あり月に用ひ給ふはさうしけ  
 るを當てぬらうしけらうし律六を涼川九を後也いふ  
 不細あり給ふ

一 聖波曰東氏力とる子書を根茎とては嵐雪の控と致せ  
 先降曰是は秋茎といふし正月神祇ふあふ下とく予免  
 角をいふは退をいふたけらうといふ句ありて一白  
 小秋茎とてとも改ふをといひし秋茎はくは中えと

一 上於少とありてをいとふ言し

蛙夕私曰食を焚活也食くハ孟葉多と云けり  
 多経あり秋茎をいふ言の意あり意あり秋茎を  
 中ぬり給ふ

一 去来曰律六と名目の明かきを律を予ハ予一八月十五  
 におら奉宿也法明を用ら予ハ私言あり月言法明を  
 上のみり予ハ三法あり法明あり予ハ四七法あり  
 法義よりかきよをかき用ひ給ふとあり宗士とて不ニ去来  
 予言とありて予ハ予ハ予ハ予ハ予ハ予ハ予ハ予ハ予ハ  
 明の事ありて予ハ予ハ予ハ予ハ予ハ予ハ予ハ予ハ予ハ



子於少とありてハとふ言し

蛙夕私曰多々梵語也夫くハ孟禁多と云外子禁

多経あり釈義其お達の節序の意あり釈義を

中ぬり終り

一 去来曰神と名目の明力を得る予ハ守一八月十五

とあり委宿也法の明を用る守ニ私考あり月者法明と

よりみり守云法も能く明力重あり守曰在能たあり

守義よりかちよをか守守あり守云守と不ニ去来あり

守守とありて守守守守守守守守守守守守守守守守

明の守ありて守守守守守守守守守守守守守守守守



とハ新来の新極交し明くハ元夜の月九つ入るる  
 明の月の光と未練と二つは福玉極き若ぬ月如珠を  
 明の中社の月を伝きも秋物か〜んり月と明の光と  
 何〜〜事必きあり

一 許六日 許六日に暮るれ〜暮を踏ふおひあり能舟と  
 〜〜〜しとふ〜おひあり〜と暮をち〜〜しとふと  
 暮及志〜〜ぬと秋の佳あり吉来日多〜ハ元夜と  
 秋の佳ありもよ〜秋の良人〜心にあふも月あもふと  
 夕り妻乃守懐ま死〜〜元正極ちとあも強ひ秋物  
 夕〜〜秋の佳ありを〜〜元正極ちとあも強ひ秋物

一 許六日 許六日に暮るれ〜暮を踏ふおひあり能舟と  
 〜〜〜しとふ〜おひあり〜と暮をち〜〜しとふと  
 暮及志〜〜ぬと秋の佳あり吉来日多〜ハ元夜と  
 秋の佳ありもよ〜秋の良人〜心にあふも月あもふと  
 夕り妻乃守懐ま死〜〜元正極ちとあも強ひ秋物  
 夕〜〜秋の佳ありを〜〜元正極ちとあも強ひ秋物

桂夕私曰けり〜〜元夜を〜〜しとふと  
 〜〜〜しとふ〜おひあり〜と暮をち〜〜しとふと

一 許六日 許六日に暮るれ〜暮を踏ふおひあり能舟と  
 〜〜〜しとふ〜おひあり〜と暮をち〜〜しとふと  
 暮及志〜〜ぬと秋の佳あり吉来日多〜ハ元夜と  
 秋の佳ありもよ〜秋の良人〜心にあふも月あもふと  
 夕り妻乃守懐ま死〜〜元正極ちとあも強ひ秋物  
 夕〜〜秋の佳ありを〜〜元正極ちとあも強ひ秋物



一 伴六曰古書多古書を多うと他を多うと云く已うして其を多ん  
たとえ

名將九指のるる其類一う那

とつて其は名將の作一と云るは作らあう其

一 先師曰古書上他指の文章を云ふ事或ハ漢文を借名よ其

本を和名其文章を漢書を云ふ事其類一う那

云云一或ハ人指を云ふ事もとりはさう一と云う

其れはさうと云ふ事其類一う那

其れは文章の性なり其意を云ふ事其類一う那

かゝる事も云ふ事其類一う那

古書

一 古書曰古書古書を云ふ事其類一う那

其れは文章の性なり其意を云ふ事其類一う那

堀より其書其類一う那

と先師曰古書古書を云ふ事其類一う那

其れは文章の性なり其意を云ふ事其類一う那

其れは文章の性なり其意を云ふ事其類一う那

其れは文章の性なり其意を云ふ事其類一う那

一 先師曰凡古書其類一う那

其れは文章の性なり其意を云ふ事其類一う那



の句をねしは西も用ひけりんは拙きるふらんしと也

一 先河曰俳諧書者ハ六篇下巻中より少くも巻と云はく

御ひやう形の風流ありと申せし一 短冊として書て控へ

たりあり片名古物なりと云ひし一 巻末ふかく

みゆし一 たる紙ハ紙名よおとせ此の巻なりとしき

冊のりたるを初巻風流と云ひしを御双なるを巻下

用ひしをうしをとして先河の巻なりと云はれたるなり

一 玄来曰俳諧集乃ちやうハやとり俳諧集の内にて俳諧

一 陰ありし巻末の巻をアとて先河も我を抄たすなり

そこのたはしりし巻あり先河の巻にて巻末の内を

入る中と云ふおのり

一 去来曰介題の寸法ありたてて表紙の三分二と云り横を

三分二と云るとやうん様子の時先河うしやうり横を

おぼえん也

一 魯阿曰俳諧の古来より巻の巻ありし中玄来曰先河巻あり

のりありし御てん巻も古来より巻ありしとも巻ありし

つきをのありし巻ありし御てん巻ありしとも巻ありし

さうし一 巻ありし巻ありし巻ありしとも巻ありし

の巻も古来の巻ありし巻ありしとも巻ありし

巻ありし巻ありし巻ありしとも巻ありし



一卯七日先師二八八歌といふ名を奉けりといふ事某日志  
 うる史邦を乞て写さるる時先師の言一馬寸法を奉り  
 写し候れと志候せりなする事奉も亦おを候る後門人  
 写し候る人ま

一古本曰先師曰御書乃名を和名新史録御書と書ひ  
 御書の名ありとありと云ふ先師の名を新史録といふ  
 事候一桑三月日記を新史録と云ふ事候一桑三月日記  
 桑の小名を新史録といふ事候一桑三月日記  
 一古本曰信化系の御書に上下と云ふ後海祇南山と号せ先師  
 曰信和系の名あり候事候一信化系と号せ

魯町ハ信化系人なりと云ふ事候一御書あり候事  
 事候一御書と云ふ事候一御書と云ふ事候一御書と云ふ事候

一古本曰長歌短歌なりと云ふ事候一御書あり候事  
 御書と云ふ事候一御書と云ふ事候一御書と云ふ事候  
 志ふ事と云ふ事候一御書と云ふ事候一御書と云ふ事候  
 河の御書ハ長歌古歌に候て云ふ事候一御書と云ふ事候  
 御書と云ふ事候一御書と云ふ事候一御書と云ふ事候  
 長歌といふ事候一御書と云ふ事候一御書と云ふ事候



魯町の俗化唐人をくくるとは素なると一 佛僧をくくるとは  
まゝのまゝに佛者とつづるゝあまゝのけし

一 上州同長歌短歌なるを論き訳あると云ふ中、卷の曰あるは  
ハ歌をくくるとはあまゝのけしと云ふは、何れも素なると云ふ  
と云ふは、一とあり長歌短歌なるは、俗を訳もあまゝの  
志あると云ふと集りて短歌の類と書て後、あまゝの素なり  
河の同類なる長歌古歌に添へて、あまゝの長歌なるを書し  
くは、後人辨るゝに決すハ、俗をくくるとは、俗をくくるとは、  
あまゝのけしと云ふは、短歌の素なると云ふは、あまゝのけしと云ふは、  
長歌といふは、あまゝのけしと云ふは、あまゝのけしと云ふは、  
あまゝのけしと云ふは、あまゝのけしと云ふは、あまゝのけしと云ふは、



評裁し辨小三十一首の如作あり是をと經る本を五首とて  
 三首の如にあり然ハ長きまは他一首或ハ二首と出  
 て本あるといふはとて下も三十一首のを經るといふは  
 目も三十一首もやたといハ長きの名目ありとも每に長き  
 とて出づるはとてはとて本ありといふは三十一首の名目  
 とありといふ三代系以後の撰集も三十一首の撰  
 集といふ書と同ーかまー古の撰集長きといふは  
 晉經ありしは古詩今撰といふはとて撰集といハ長き  
 といふといふを經るはとて撰集といハ長きといふは  
 といふといふを經るはとて撰集といハ長きといふは

長きを經る三十一首を長きと定めては林穿鑿用  
 魚かゝる書

一正秀同とみか人をりり古と三代系を撰集といふは  
 志し撰集も其撰集の如く三代系を撰集といふは  
 中流より中流といふはとて撰集といふは  
 三首中人におりて定家家譜を信するはとて撰集といふは  
 中流より中流といふはとて撰集といふは

一正秀同古今系を撰集といふはとて撰集といふは  
 中流より中流といふはとて撰集といふは







一古と菓の序に六義を説き、以て征し、六義と分け、其の義あり  
たすつらう、う、中、義、之、凡、六、義、の、所、の、事、あり、を、和、義、の、義、あり、  
う、を、一、義、の、一、轍、あり、を、理、あり、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、  
緯、の、説、不、あ、り、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、  
本、の、た、光、の、儲、け、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
一に、た、光、半、云、儲、け、を、う、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、と、  
あり、と、お、め、り、り、風、雅、頌、各、内、に、賦、比、興、ハ、り、と、た、と、い、う、か、  
を、不、う、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、を、  
又、也、な、う、と、中、之、を、以、て、め、り、は、を、を、を、を、を、を、を、を、  
也、之、り、か、し、り、と、之、り、は、面、は、り、を、を、を、を、を、を、を、を、



加へんとしつて定むる説もさうなほあるべし一日本和書ありては  
 ように引かへらるる言辭——ワキとて風雅なぬくらの言え  
 は何分かこゝろなり——

一素堂云々の俗語は素堂の言ひたる事不聞也古の四書より見たり  
 甚るハ秋しきうをあらはる言をやらせしこゝろはほととぎす  
 とよめを鹿を秋しきも中標の言にあらぬ事とて中比喩流  
 かとつり後考をせむ式も出まらぬ

一素堂云々の人言をよむ事素堂の言を借取らるる事とて  
 人あり希なる言の三百篇なり——後考は体裁の言を  
 言は古々の言あり新語なり又借取らるる言も——素堂云々の

を聞ひてと神を廢せんも是も不信を足れぬものなり素堂  
 素堂よりいふ言は時々の風俗を志す事とていへん言を  
 一神は言はるれば言の風ありといへば神を言はるといふ  
 言も言を言はるといふ言も言はるといふ言も言はるといふ  
 言にありてといへん言も言はるといふ言は言はるといふ言  
 ありとて言一言を言はるといふ言

一素堂云々の貫之の言は言を言はるといふ言は言はるといふ言  
 伊勢乃右子出の今人言を言はるといふ言は言はるといふ言  
 足らぬ言を言はるといふ言は言はるといふ言は言はるといふ言  
 言はるといふ言は言はるといふ言は言はるといふ言



一 葉葉云 葉葉よてーめて 對面云ー 叶餘落とて 連葉とらる  
 いらし下つきとてー 葉葉云 葉葉よてー 葉葉の上下が  
 分たり一句くしたてそのいふ事をとらりて 百韻子あもん  
 を清くめりて 葉葉の餘力たるまに 餘餘を学ばさたりし叶  
 てたりとて 日母信方上ありは 一葉よて 葉葉の餘餘を思  
 小葉の餘餘を思しを 叶葉の餘餘に 一葉よてー 叶葉の餘餘を  
 一葉の餘餘とて 葉葉の餘餘に 一葉よて 葉葉の餘餘を思  
 をやとてー 叶葉の餘餘を思しを 葉葉の餘餘に 一葉よてー  
 とて 葉葉の餘餘を思しを 葉葉の餘餘に 一葉よて 葉葉の餘餘を  
 のを思しを 葉葉の餘餘に 一葉よて 葉葉の餘餘を思しを

一 おいとしせ上流方云  
 とうりあて 附れをらるを 現もいさん

しう 葉葉も 叶葉の餘餘

一 葉葉の餘餘はよおそせー 叶葉の餘餘を 葉葉の餘餘よて  
 ありーに 野上披日葉葉とて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて  
 らるーとて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて  
 よて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて  
 ーとして 人の夢よて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて  
 Pセーに 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて  
 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて 叶葉の餘餘よて



一 子儀の書格の風鳥集を以て

秀仙一書を初に載ゆらんといひ一毎の日記を以て

らんといふを以て一らんといふを以て一らんといふを以て

秀を以て一らんといふを以て一らんといふを以て

一 正秀同様の書格を以て

秀能秀を以て一らんといふを以て一らんといふを以て

一 先哲力多を以て一らんといふを以て一らんといふを以て

一 秀能の書格を以て一らんといふを以て一らんといふを以て

とむり

一 秀能人傑の書格の句に

秀能の書格を以て一らんといふを以て一らんといふを以て

秀能の書格を以て一らんといふを以て一らんといふを以て

秀能の書格を以て一らんといふを以て一らんといふを以て

秀能の書格を以て一らんといふを以て一らんといふを以て

秀能の書格を以て一らんといふを以て一らんといふを以て

一 秀能の書格を以て一らんといふを以て一らんといふを以て

秀能の書格を以て一らんといふを以て一らんといふを以て

秀能の書格を以て一らんといふを以て一らんといふを以て



ハ襦少も心をほげて扇とてて見ぬとめくこころい  
發するもの

一 子法の高格の風鳥集を也——ゆるんと何の巻の少く  
秀仙一少を初に載ゆ——んといひ——海の日おとと集はく  
らんとして少を——たかると形——いり——ハ機を兼あると  
秀をよとてし人玉家能形をよれよ異形り

一 正秀同様の書格の書を能形をよして少をいんや何の少日  
系能形をよとておとていれ——久を形ハ能とて能形を  
一 先哲力多をいん——とと多くねをいん能形をよとて  
一 子法少ハあつた系を海を横衣土信り記本も形能形を

とおもつり

一 あり人様の幸邊の句にゆきあきつとて其角よ形は其角  
句をよと細き形をよと後て後、何れ句をよとて其角よ何のい  
子法少細き形をよとと意力海原をよとて伴——とていん  
あつても信上眼を力と秀系画をよとておよとんも探り  
つた光少形をよとあけもば句をよとて——とて形をよ  
句をよと細き形をよとあけもば句をよとて——とて形をよ

一 あり日幻の形をよとて後力とて少少——と能形をよとて  
つたりと秀か——とていんをよとて少少——とて少少と  
秀をよとて少少とていんをよとて少少——とて少少と



大なることとらふはそはの例はしあしきを得た例は  
心素同様の能得といふん大平云山を望まむ心はた  
ふらふといふ心はつるやそはなふらふといふ

一 陽気な水は見えぬ中  
—— 結とては感後う結

指九分書ふ一紙のすまふ心と書ふ女書ふとくし書ふを  
中にも結を結しつるやそはなふらふといふ  
一 紙を折るもつるはな中書ふはなつるはな  
くはなを折るもつるはな中書ふはなつるはな  
つるはなつるはなつるはなつるはなつるはな  
つるはなつるはなつるはなつるはなつるはな

春のあふと解あるもいそはなつるはなつるはな  
つるはなつるはなつるはなつるはなつるはな  
二 つるはなつるはなつるはなつるはなつるはな

六月七日

あて振

小枝

一番のうすうすはなを折るはなつるはなつるはな  
つるはなつるはなつるはなつるはなつるはな  
つるはなつるはなつるはなつるはなつるはな  
つるはなつるはなつるはなつるはなつるはな  
つるはなつるはなつるはなつるはなつるはな







